

# 地方都市圏の成長過程に関する研究(第2報)

## ——圏域の拡大——

(昭和53年10月31日 原稿受付)

開発土木工学教室(大学院)	国	広	俊	夫
(株) 浅沼組	浅	田		毅
開発土木工学教室	佐	々	木	昭
				士

### The Studies on the Growth of the Regional Agglomeration (2nd Report) On the Expansion of the agglomeration

by Toshio KUNIHURO  
Tsuyoshi ASADA  
Shoji SASAKI

In the first report of this series, the popular concentration has a tendency to appear in the urban fringe, therefore the distribution of the agglomeration expand into the rural area.

The results of the questionnaire to send 3000 residents at Hinosato and Jugaoka in Munakatacho are obtained as follows.

- 1) The growth of the population in that districts had been remarkable before oil shock, but after that the growth rate has been stagnant.
- 2) The most of the residents moved from Kitakyushu or Fukuoka.
- 3) A pure and healthy environment is the most variable factor to fix residence.

#### 1. 緒言

前報にて、福岡県内の都市圏とその現況について解析し、大都市の周辺市町村が著しい人口増加を示している、すなわち、都市圏域を拡大するような人口増が多いことを明らかにした。

これら都市圏の成長過程に重要な要因とみなされる圏域の市町村の人口動態を検討し、その市町村の人口増加の要因から逆に都市圏全体の成長過程を分析することにした。

本報では、福岡県における北九州、福岡2大都市圏の中間に存在し、両都市圏の接点であり、しかも近年人口増加の顕著な宗像町の人口増加状況を調査した結果を報告するものである。

#### 2. 宗像町の現況

宗像町は、前述のように福岡市と北九州市の中間に位

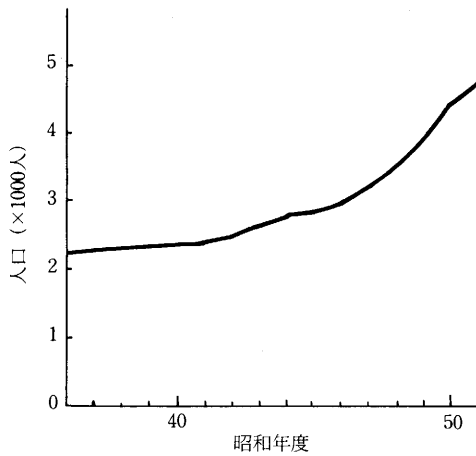
置しており、地形的には比較的高い山はなく全体に丘陵地が散在していて宅地の開発には適している。町の中央を国道3号線、および国鉄鹿児島本線が走り北九州市、福岡市方面への交通手段は確保されている。また、昭和36年の国鉄電化以来、列車は増発、スピードアップされ、通勤、通学時間の短縮がなされた。こうして、宗像町は、北九州、福岡両市の住宅地として注目され、宅地化が行なわれ、現在も進行している。とくに昭和38年に森林都市株式会社、民間による都市計画事業を起し、赤間駅近辺の自由ヶ丘地区にニュータウンの建設を開始されたのを始め、昭和46年には日本住宅公団が、アパートを中心とする賃貸ならびに分譲住宅を目的として、東郷駅付近の日の里地区の造成を始めた。こうして、現在、宗像町は、日の里、自由ヶ丘を中心にして西日本最大のニュータウンとなっている。

宗像町の人口の推移を第1図に示した。図のように、年々増加し、昭和45年から昭和49年までの5年間の

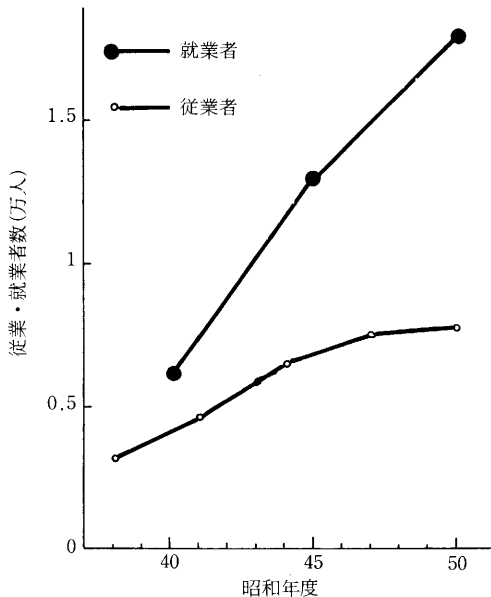
口の動きは、自然増に対して社会増は約7倍であり、その後、9,477人となっている。

第2図に示した宗像町における就業者数と従業員数の推移から、就業者の増加に比べて従業員の増加は比較的小さい。これは、宗像町に新しい従業員発生し人口が集中したのではなく、宗像町以外の地域の従業員が、住宅を求めて流入したことによるものである。

宗像町内の55ヶ所の部落の人口成長率を求めて等高線を描いて第3図に示した。図は昭和48年から昭和49

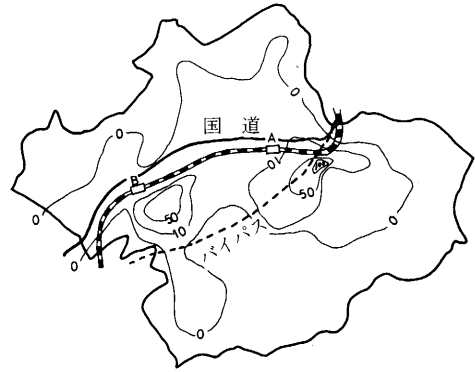


第1図 宗像町の人口推移



第2図 就業者ならびに従業員の推移

年について求めたもので、図から明らかなように、赤間駅南側から国道3号線バイパス間の自由ヶ丘と、東郷駅南側の日の里の両地区の人口成長率が、とくに高くなっている。このことは、自由ヶ丘地区と日の里地区が宗像町の代表的な住宅地開発地区であり、これら2地区の調査により宗像町人口増加状況が明らかとなることを示す。



第3図 宗像町の人口増加状況 (昭和48年～49年、数字%)  
A 赤間駅、B 東郷駅

### 3. 調査の概要

前述のように人口急増の自由ヶ丘、日の里両地区の住民に対する次のようなアンケート調査を行なった。

アンケートは返信用郵便葉書に家族数、年収、職業、駅までの所要時間、住宅の種類、前住所、人居時期、住居面積、利用交通機関、選択理由の11項目を印刷し、調査趣意書を同封し、自由ヶ丘地区1000枚、日の里地区2000枚を、それぞれ各家庭に無作為配布した。

調査対象地区戸数、回収状況などをまとめて第1表に示した。表のように回収率は、35.5%であったが、年収など、意図的に書き入れられていないものや、記入洩れのものなどが56通あり有効回収率は33.7%となった。

第1表 アンケート調査数

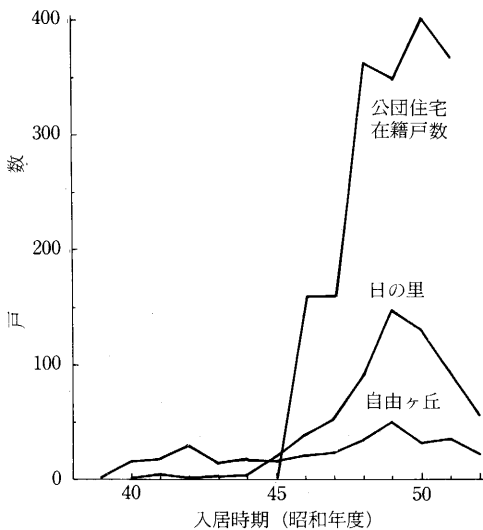
	地区 戸数	アンケート数		
		配布	回収	回収率(%)
自由ヶ丘	1605	1000	359	35.9
日の里	3499	2000	651	32.6
合計	5104	3000	1010	33.7

## 4. 調査結果とその分析

### 4.1. 入居時期

第4図は、入居年次と入居戸数を示したものである。自由ヶ丘地区の入居戸数は昭和42年まで増加を続け、昭和43年で減少し、その後、昭和49年まで増加している。日の里地区について見ると、日本住宅公団が普通賃貸住宅と特定分譲住宅の供給を昭和45年に開始して以来、昭和49年まで入居戸数は急増している。このように好況時には、住宅需要が増加し、著しい人口増加を示した。しかし、昭和50年以降、期を同じくして両地区とも入居戸数は大幅に減少している。昭和50年以降は、昭和48年12月のオイルショックによる影響が現われ、宅地開発の減少、住宅需要の低下などにより入居戸数が急激に減少したものと考えられる。住宅公団が、昭和50年に募集したアパートの未入居戸数は34戸、昭和51年には、116戸にも達していることから住宅需要の減退は明らかである。

以上からニュータウンと呼ばれる住宅地は経済的変動の影響が、人口増加に顕著に現われることを示している。

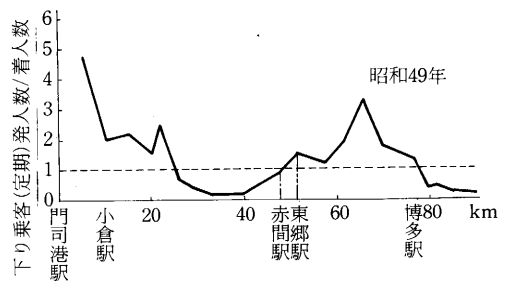


第4図 入居年次別入居戸数

### 4.2. 勤務地と前住所

宗像町が、北九州、福岡両都市圏から影響を受けながら成長している状況を明らかにするため、勤務地、前住所および、両者の関係を分類、考察することにした。

国鉄鹿児島本線の下り定期乗客数の発人数を着人数で割った値を各駅ごとに求め第5図に示す。発人数を着人数で割った値が1を下回る駅は上り方面へ通勤、通学する者が下り方面より多いことを示す。1より大きい場合は下り方面の通勤、通学者が多いことを示す。宗像町内にある赤間駅、東郷駅の値は、前者が1以下であり北九州方面へ、また後者は1より大となり福岡市方面への通勤、通学者が多いことを表わし、福岡、北九州両都市圏の境界が宗像町に存在することを明らかにしている。



第5図 下り定期客の発着比

次に、自由ヶ丘地区の前住所と勤務地との関係を第2表に示した。北九州地区へ勤務するものが全体の53%と大きく、次に、福岡市地域は26%となっている。また、前住所と、勤務地との関係でも北九州地域が圧倒的に多く40%以上を占めている。入居時期との関係からも、昭和45年以降、半数以上を占め、値に大きな変動がみられない。自由ヶ丘地区は、北九州都市圏に包含され、また、その都市圏の自由ヶ丘地区への影響は変化の少ない一定したものとなっている。自由ヶ丘地区は今後とも北九州地域に勤務先を持つ世帯が中心となり、入居して行き、急激な増加はないものの北九州都市圏の重要なベッドタウンとして成長していくと予測される。

日の里地区についても同様に調査した。日の里地区は、前述したように、公団の開発による賃貸アパートが存在し、またその戸数も多く、一戸建てだけの自由ヶ丘地区と性格を異にしている。賃貸アパートは、手取り早い住宅入手の手段となり、勤務地が変わっても個人住宅ほど執着することもなく容易に移り変わる特性がある。日の里地区でのアパートの入居者についてもかなりの出入りがあったとみなされる。一戸建て住宅と賃貸アパートはその性質を多少異にしているため、それらのデータを分けて集計した。

第2表 前住所と勤務地の関係(自由ヶ丘)

勤務地 \ 前住所	北九州地域	福岡地域	先代より	県内	県外	合計
北九州地域	165	8	0	12	14	199(52.9)
福岡地域	41	38	0	9	10	98(26.1)
宗像町内	7	4	3	7	3	24(6.4)
宗像周辺	4	0	0	5	2	11(2.9)
その他	11	7	1	10	15	44(11.7)
合計	228 (60.6)	57 (15.2)	4 (1.1)	43 (11.4)	44 (11.7)	376(100)

( )内は%を示す

第3表 日の里地区入居者の前住所と勤務地

## (イ) 公団アパート

勤務地 \ 前住所	北九州地域	福岡地域	先代より	県内	県外	合計
北九州地域	23	15	2	10	6	56(27.6)
福岡地域	20	37	2	20	35	114(56.2)
宗像町内	3	5	0	3	5	16(7.9)
宗像周辺	0	4	0	4	1	9(4.4)
その他	1	2	0	2	3	8(3.9)
合計	47 (23.2)	63 (31.0)	4 (2.0)	39 (19.2)	50 (24.6)	203(100)

## (ロ) 1戸建て個人住宅

勤務地 \ 前住所	北九州地域	福岡地域	先代より	県内	県外	合計
北九州地域	139	19	1	10	10	179(40.1)
福岡地域	34	100	3	11	32	190(40.4)
宗像町内	7	7	4	9	2	29(6.5)
宗像周辺	8	3	2	6	5	24(5.4)
その他	12	11	0	3	8	34(7.6)
合計	200 (44.8)	140 (31.4)	10 (2.2)	39 (8.7)	57 (12.9)	446(100)

## (ハ) 日の里地区の合計

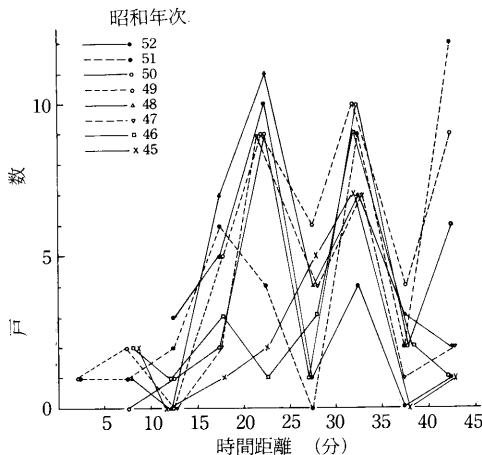
勤務地 \ 前住所	北九州地域	福岡地域	先代より	県内	県外	合計
北九州地域	162	34	3	20	16	235(36.1)
福岡地域	54	137	5	31	68	295(45.3)
宗像町内	11	12	4	12	9	46(7.1)
宗像周辺	8	7	2	10	6	33(5.1)
その他	13	13	0	5	11	42(6.4)
合計	248 (38.1)	203 (31.2)	14 (2.2)	78 (12.0)	108 (16.5)	651(100)

第3表(イ)に公団アパート入居者の前住所と勤務地の関係を示す。前住所の合計を見ると福岡地区が最も大きく全体の31%、次いで県外の項で25%と大きな値を示している。勤務地では、福岡地区が最も大きく56%、28%の者が北九州地区に勤務している。勤務地と前住所との関係を見ると、とくに、県外から入居し、福岡地域に勤務するものが、自由ヶ丘より目立って多い。東京、大阪などの大都市圏からのUターン組と、大企業の九州への進出する拠点として、福岡市に足場を置いた企業の従業員の住宅とみなされる。県内からの入居者は約半分が福岡地域であり、4分の1が北九州地区である。北九州地域からの入居者の43%が福岡地域に勤務している。以上のことから、流動的性格を含むアパート住民は福岡都市圏に包含されていることが明らかである。また、近年、北九州市の金融機関を始め管理機能が福岡市へ移動したのが見られ、それらの従業員などとみなされる。

日の里地区の個人住宅の集計を第3表(ロ)に示した。公団アパートと異なり北九州地域からの入居者は福岡地域のそれよりも多い。福岡市が九州の中核管理都市として、また、三次産業主体の都市として成長してきたため、増加する住宅需要と住宅公団による開発とにより宗像町への福岡都市圏の影響の大きさが年々増加していることを示す。

4.3. 通勤の利用交通機関と所要時間

住宅選択の条件の1つとして交通機関の利便性が大きく挙げられている。そこで、入居年次と駅までの徒歩所要時間を調査し、自由ヶ丘についての結果を第6図に



第6図 赤間駅までの徒歩時間距離(自由ヶ丘)

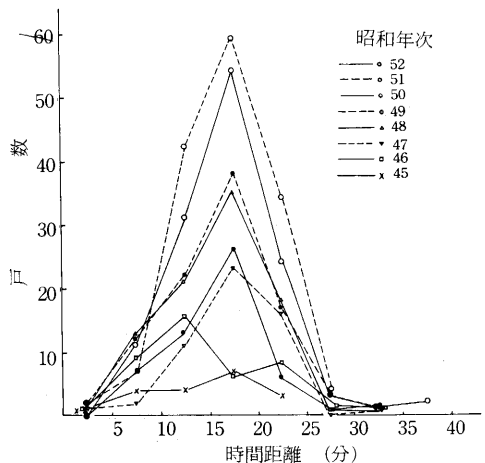
示した。図のように入居時期による相違は明瞭には現われていないが、昭和45~46年は駅から30分~35分の徒歩時間距離が最大となっている。しかし、昭和47年以降は、20分~25分と30分~35分の2個所でピークが現われている。さらに、昭和49年~51年には40分~50分の遠い位置に入居した者がかなりの数に達している。自由ヶ丘は民間企業(森林都市株式会社)が総面積300万m<sup>2</sup>、人口2万人の規模を目標とし、駅から離れた地点に商店、事業所を置き南北に带状に開発した結果このように入居時期による相違が少ないとみなされる。しかし、今後は駅から離れた地点まで開発しなければならなくなり、今後の入居条件が悪くなる可能性は見られる。

次に駅までの交通手段について調査した結果を第4表に示した。表のようにバスの利用者が最も多く、次に自家用車が多くなっている。赤間駅周辺の駐車施設の不備を考えるとキスアンドライドか路上駐車がよいと考えられる。

第4表 国鉄利用車の駅までの交通手段(自由ヶ丘)

	人口	百分率(%)
徒歩	69	26
バス	109	41
自家用車	71	28
バイク自転車等	16	15

第7図は、日の里の入居年次ごとの駅までの時間距離と戸数の関係を示した。図のようにほとんどが17分を最大とする正規分布に近い分布を示している。日の里は



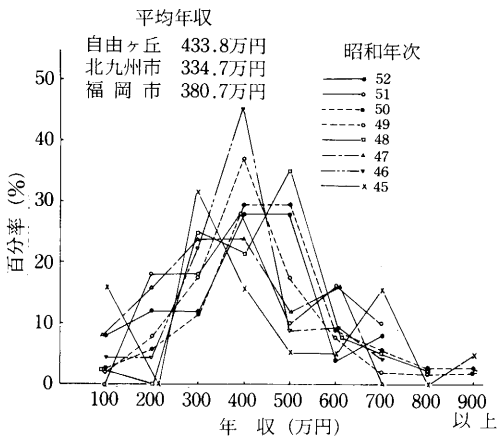
第7図 東郷駅までの時間距離(日の里)

東郷駅を中心とする扇形に開発され、自由ヶ丘に比較し駅へは近く駅までの交通機関の利用はほとんど見られなかった。駅前には自転車の駐車が非常に多い、しかし、本調査の回答にはほとんど現われなかった。

4.4. 入居世帯の年収

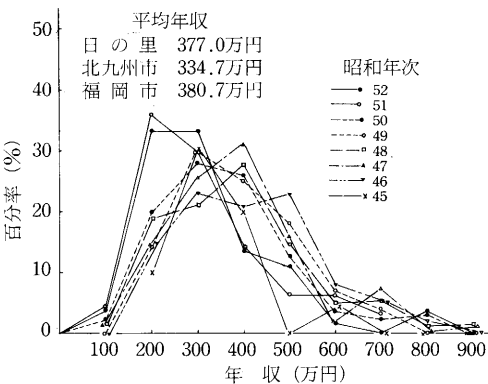
入居世帯の階層を調査する目的で年収の回答を求めたが、未回答がかなり現われた。

第8図に自由ヶ丘入居世帯の入居時期別の年収分布を示した。図のように入居年次別の特徴は見出されなかった。平均年収で比較すると北九州、福岡両市よりも高額である。分譲個人住宅に購入し入居出来る経済力を考えると予測出来る結果である。



第8図 入居時期と世帯年収の関係 (自由ヶ丘)

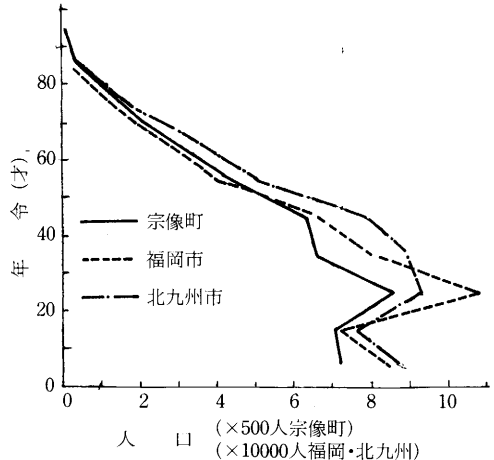
次に第9図に日の里入居世帯の入居時期別の年収分布を示した。昭和52年と51年に入居した世帯では150万~250万円が最も多く、それ以前は300万円近くが多い。



第9図 入居時期と世帯年収の関係 (日の里)

平均年収を見ると377万円と自由ヶ丘より低く、福岡市に近い値となっている。日の里は公団の賃貸アパートがあり、その入居者は比較的若い層とみなされその結果が自由ヶ丘との差を生じたものと考えられる。また、福岡市の年収に近いことは福岡市への通勤者の多いことからも予測されることである。

日の里と自由ヶ丘だけの年齢構成の資料は得られなかったが、宗像町全体の年齢構成を第10図に示した。図のように北九州市20代が少なく30代が比較的多い。しかし、福岡市は逆に20代が非常に多く、30代から少くなっている。宗像町は従来からの居住者もあるので福岡市ほど20代が多くはないが、北九州市より多く、とくに40代が多い。この資料中年層が多く入居したとみなされる。



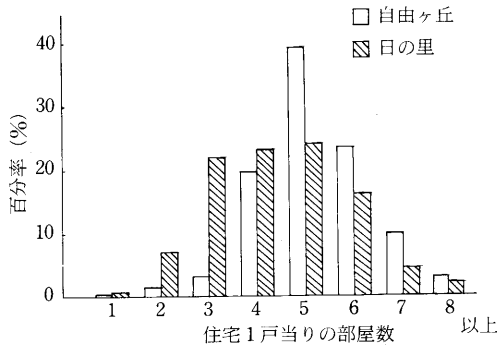
第10図 年齢構成

4.5. 住宅面積

住宅面積を調べる目的で畳数と部屋数の回答を求めたが、畳数の回答要領が満足したものが得られなかった。部屋数の調査結果から住宅面積の相対量を予測、検討することにした。

第11図は住宅1戸当りの部屋数の分布を示したものである。自由ヶ丘については5部屋の住宅が最も多く、全体の39.3%を占めて正規分布に近い分布を示している。平均部屋数は5.24部屋で北九州市の平均3.84部屋に比較するとかなり広いものである。これは自由ヶ丘地区1戸建て分譲住宅で比較的部屋数の少ないアパートなど存在しないことによる。また、1人当りの部屋数も1.42で北九州の1.26に比較して多くなっている。

日の里の部屋数の分布を見ると自由ヶ丘と異なり、2DK、3DKなどの公団アパートの影響が現われ3、4、5部屋の住宅がほぼ同数存在する。1戸当りの平均は自由ヶ丘より少なく4.45部屋である。しかし、北九州市の平均より多い。なお、1人当りの部屋数は1.23で北九州市とほぼ等しい。

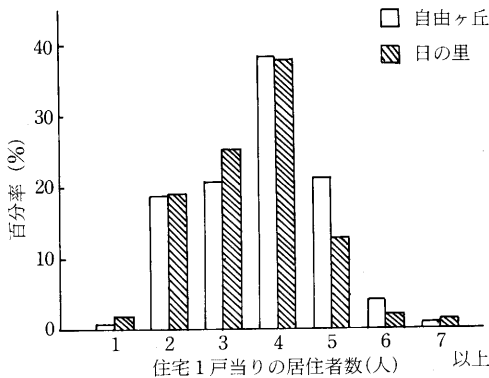


第11図 住宅1戸当りの部屋数

4.6. 家族数

住宅1戸当りの家族数すなわち居住者数をまとめて第12図に示した。自由ヶ丘、日の里両地区とも類似した分布を示し、平均家族数も自由ヶ丘3.68人/戸に対し、日の里は3.60人/戸とわずかに少ないだけである。

これから夫婦に子供1人ないし2人の家族が多く、標準的な家族構成とみなされる。しかし、世帯数から考えると北九州市の3.22人/世帯、福岡市の3.03世帯、宗像町の平均3.33人/世帯よりいずれも多い。

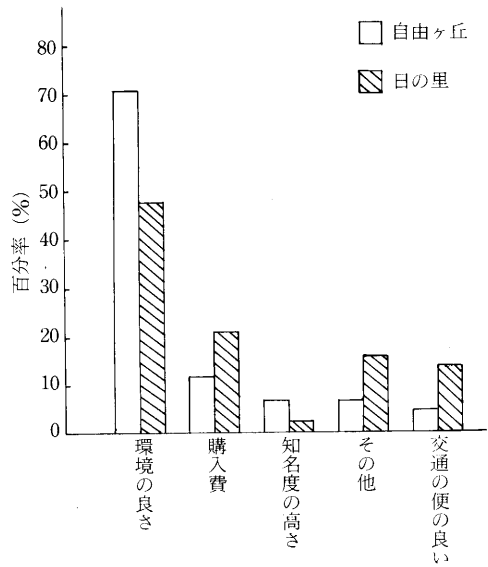


第12図 住宅1戸当りの家族数

一般に都市部では独身者が存在するが、住宅を購入して定住する意志のある者は家族が存在し、しかも適当な所得を得られる年齢階層となり子供を持っている確率が非常に高いためこのような家族数になったと考えられる。

4.7. 住宅選択理由

自由ヶ丘、日の里の両地区とも他都市への従業者が多いことから他の市町村に住宅を選択する可能性のあった者も多いと考えられる。そこで、とくにこの地区に住宅を求めた理由を回答して貰った。その結果を第13図にまとめて表わした。



第13図 住宅選択の理由

自由ヶ丘では環境の良さがとくに多く70.7%にも達している。現在、住宅地域を造成する場合検討すべき最大の問題とみなされる。なお、北九州市から自由ヶ丘へ入居した者が多いがとくにこの環境の良さを指摘した者は日の里も含め多かった。次に、都心部より地代の安いことから購入費(20.5%)森林都市としての知名度(6.4%)により住宅を日の里に選択したようである。駅までの距離が離れているので交通の便の良さはわずかに5.1%しかいなかった。

日の里でも環境の良さが一番多いが47.6%と自由ヶ丘に比較が少ない。購入費による者が20.5%と高く、交通の便の良さも13.6%と自由ヶ丘より多くなっている。しかし、知名度は2.5%と少ない。

#### 4.7. 将来の予測

40年代の好況の中に強い住宅需要が生じ、その結果として各地にニュータウンが建設された。森林都市と呼ばれる自由ヶ丘はこれらの先駆的な開発であり、入居者の多くが指摘しているように好しい生活環境を有している。

しかし、前述のように昭和48年末のオイルショック以後の経済不況は住宅需要にも大きく影響を及ぼしその一端が、自由ヶ丘、日の里への入居数減少へ影響したとみなされる。

したがって、不安定な経済情勢の中では過去の資料だけから将来の予測は困難であるが、現状のままの情勢が継続するとして宗像町の人口増加量を検討した。

北九州市へ他市町村から通勤している者の職種を調べると第2次産業が多く、第3次産業従業者も運輸電気ガスなど第2次産業に密着した者が多い。そこで、簡単に福岡市の第3次産業従業者数と北九州市の第2次産業従業者数を宗像町の人口に重回帰解析した結果次の式が得られた。

$$y = -24850 + 0.17x_1 + 0.08x_2$$

ただし  $y$  : 宗像町の人口(人)

$x_1$  : 北九州市の第2次産業従業者数(人)

$x_2$  : 福岡市の第3次産業従業者(人)

なお、重相関係数は0.95である。

これから北九州都市圏の成長率の影響が宗像町の人口成長率に及ぶ影響は福岡都市圏の2倍以上となった。

#### 5. 結 言

福岡県内に存在する2地方中核都市である北九州、福岡両市のほぼ中間に位置し、両都市圏の成長過程を示す上で重要な宗像町とくにその代表的な自由ヶ丘、日の里両地区を取り挙げ、アンケート調査を行なったその結果から次のようなことが明らかになった。

(1) 自由ヶ丘、日の里両地区とも昭和47、48年の高度成長期にはその入居者は多いが、不況となった昭和50年から入居者は激減している。したがって、ベッドタウンの入居者は経済変動の影響が大きいとみなされる。

(2) 両地区とも北九州、福岡両市への従業者が多く80%以上である。北九州、福岡両都市圏に包含されたベッドタウンとみなされる。

(3) 北九州市への従業者は北九州からの転入者がほとんどであるが、福岡市への従業者には県外からの転入者を相当含む。これらは両都市圏の拡張すなわち中核都市の経済情勢を表わしている。

(4) 両地区とも北九州市よりも比較的収入の高い階層が入居している。

(5) 家族構成は自由ヶ丘が3.68人/戸、日の里が3.60人/戸とほぼ等しいが、都市部の平均世帯人数よりも高い。

(6) 住宅選択理由に環境の良さを指摘する者が非常に多く、生活環境が新住宅地造成の最大問題とみなされる。

#### 謝 辞

本研究を遂行するにあたり、日本住宅公団九州支所、宗像町役場ならびに調査対象地域の住民各位に絶大なご支援を賜った、ここに謝意を表す。

また、調査には開発土木工学教室渡辺義則講師を始め交通工学研究室の諸氏のご協力をいただいた感謝を表わす。

#### 参 考 文 献

- 1) 総理府統計局：国勢調査報告(昭35~50)。
- 2) 福岡県：福岡県統計年鑑(昭38~49)。
- 3) 福岡県：福岡県勢要覧(昭40~50)。
- 4) 九州経済調査協会：福岡都市圏の住宅問題。
- 5) 九州経済調査協会：北九州における住宅事情の特徴と住宅・宅地開発の実態。